

巻末資料

資料 1 ルーブリック

コモンルーブリック（ライティング）2012****
1 年生春学期～2 年生春学期（下位学年用）

	3	2	1	0
課題に対する記述	課題に対する解答が書かれている。	課題に対する解答を部分的に書いている。	課題に対する解答を書こうとしているが、論点にブレがあり、テーマに対する解答として十分ではない。	課題と関係ない内容を書いている。
論理的構成	結論に至るまでの論理的なプロセスをたどることができる	結論に至るまでのプロセスはたどれる。前後関係の構成に工夫が必要である。	結論に至るまでのプロセスが整理しきれていない。	結論に至るまでのプロセスを示していない。
レファレンス資料（着想を得たものや自分の考えを支持するための先行研究や文献、データ）	レファレンス資料を適切に示して、引用や注をつけている。	レファレンス資料を示そうとしている。引用・参照方法に改善が必要である。	レファレンス資料を参照していることがうかがえるが、示していない。	レファレンス資料を使っていない。
文章の体裁 ①段落が適切に作られている。 ②句読点の付け方が適切である。 ③主部と述部の対応にねじれがない。 ④文体が統一されている。	文章の体裁の項目に配慮できている。	文章の体裁の項目のいくつかは配慮できている。	文章の体裁に配慮しようとしているが、不十分である。	文章の体裁が整えられておらず、読み進めることができない。
表現の推敲 ①同じ言葉の繰り返しや多用がない。 ②誤字・脱字がない。 ③仮名使い・送り仮名の誤りがない。 ④専門用語を正しく用いている	表現の推敲ができています。	表現の推敲のいくつかはできています。	表現の推敲をしようとしているが、不十分である。	表現に間違いが多く、推敲が不十分である。

- このルーブリックは「1 年生春学期～2 年生春学期」を対象にしています。
- 科目の必要に応じて、このルーブリックの下段に項目を追加することができます。

関西国際大学

コモンルーブリック（プレゼンテーション）2011****
全体

	5	4	3	2	1	0
論点の明確さ	主要な論点や主張及び最も言いたいことが、聴衆が聞いていてはっきりとして分かりやすく、強く印象に残る。	主要な論点や主張が伝わり、最も言いたいことははっきりとして分かりやすい。	論点や主張が整理されていて、基本的な論点が分かるようになっている。	論点や主張についての整理がある程度（部分的に）出来ており、言いたいことがある程度伝わってくるが改善すべき点がある。	論点や内容の整理が十分でなく、言いたいことがあまり伝わってこない。	論点が明確でなく、何が言いたいことなのか全く伝わってこない。
論理的構成と展開	結論に至るまでのプロセスが、プレゼンテーションの効果を高める応用型（年代順型、問題解決型、分析型等）を用いて構成されており、論理的に一貫した内容になっており、説得力がある。	結論に至るまでのプロセスが、プレゼンテーションに関する基本型（序論、本論、結論の流れ）を用いて構成されており、論理的に一貫しており理解しやすい。	結論に至るまでのプロセスは、プレゼンテーションに関する基本型（序論、本論、結論）を用いて構成している。	結論に至るまでのプロセスはたどれるが、構成・展開の型や、内容の論理性に改善すべき点がある。	結論に至るまでのプロセスの整理ができていない。結論は示されているが、なぜそのような結論になるのかわかりにくい。	論理的構成をたどることができない。
主張の立論に必要な資料（図表、統計、文献引用等）の利用	立論に必要な資料（説明、事例、図、統計、標語）を、効果的で信頼のできる複数の情報源（本、論文、Web、リサーチ結果等）から選択し、引用し用いている。	立論に必要な資料を、信頼できる複数の情報源（本、論文、Web、リサーチ結果等）から選択し、用いている。	立論に必要な資料を用いているが、情報源（本、論文、Web、リサーチ結果等）の選択や、引用方法や長さがある程度（部分的に）できている。	立論に必要な資料を用いているが、情報源（本、論文、Web、リサーチ結果等）の選択と選択部分が適当であるとはいえず、引用・参照方法に改善すべき点がある。	立論に必要な資料を参照しているが、出典が明らかでなく、立論の根拠とは伝わってこない。	立論に必要な資料を使えていない。
プレゼンテーションの技術（音声的表現：声の大きさ、声の高さ、話すスピード、話の間の取り方など）	言葉の選択が適切であり、声の大きさや声の高さ、話すスピードや話の間の取り方が適切である。聞き手にとってわかりやすく効果的なプレゼンテーションになっている。	言葉の選択に誤りがなく、声の大きさや声の高さ、話すスピードが適切で、話の間の取り方が聞き手に配慮されている。	言葉の選択にほとんど誤りがなく、声の大きさや声の高さ、話すスピード、話の間の取り方がある程度（部分的に）できている。	言葉の選択の誤りは部分的にみられ、声の大きさや声の高さ、話すスピード、話の間の取り方（「えー」「あー」といった口頭のつなぎ言葉が耳に残る等）のいずれかに改善すべき点がある。	言葉の選択に誤りがあり、声の大きさや声の高さ、話すスピードが適切で、話の間の取り方（「えー」「あー」といった口頭のつなぎ言葉が多い）に問題がある。	言葉の選択に誤りが多く、音声的表現の技術を意識的に使えていない。声が聞き取りにくく、終始一本調子である。

	5	4	3	2	1	0
テーマのたて方 (調査目的の設定)	独創的で、明確なテーマが設定されており、それについての仮説や調査項目が分かりやすく整理されて示されている。	明確で、実現可能なテーマが設定されており、それについての仮説や調査項目が示されている。	実現可能なテーマが設定されており、それについての仮説や調査項目が示されている。	実現可能なテーマが設定されており、一般的な仮説や調査項目がたてられている。	テーマは設定されているが、仮説や調査項目が分かりにくい。	テーマがはっきりしない。調査項目、および仮説が示されていない。
これまでに明らかにされている知見の活用	信頼できる様々な情報源から、これまでに明らかにされた知見や課題を、自分が明らかにしようとしている内容に関連づけて活用している。	信頼できる複数の情報源から、これまでに明らかにされた知見を、リサーチに関連づけて活用している。	複数の情報源からこれまでに明らかにされた知見を示し、整理している。	複数の情報源から、これまでに明らかにされた考え方や研究内容を、部分的であつても示している。	限られた情報源から、これまでに明らかにされた考え方や研究内容を、何かしら紹介しているが、テーマとの関係が乏しい。	これまでの先行研究について示されていない。
研究方法と分析の視点	複数の研究方法や分析の視点から、目的とテーマにふさわしいいくつかの研究手法を用い、明確な分析の視点を示している。	複数の研究方法や分析の視点から、目的とテーマにふさわしい研究手法を用い、分析の視点を示している。	目的とテーマに沿った研究方法を用い、分析の視点を示している。	研究方法と分析の視点について、必要なポイントを捉えている。	研究方法と分析の視点について示されているが、必要なポイントが捉えられていない。	研究方法と分析の視点が示されていない。
分析	焦点に沿ってリサーチした内容を組織的にまとめ、類似点・相違点・パターン化など様々な観点から検討している。	リサーチした内容を組織的にまとめ、類似点・相違点・パターン化など様々な観点から検討している。	リサーチで得られた情報をまとめ、類似点・相違点・パターンなど何らかの法則性を検討している。	リサーチで得られた情報をまとめることができている。	リサーチで得られた情報を列挙しているが、まとめることができている。	リサーチした内容をまとめられていない。
結論	リサーチから明らかになったことについて整理し、専門基礎知識(自分の専門分野の概念や枠組み)を効果的に用いて、論理的に説明できている。	リサーチから明らかになったことについて整理し、専門基礎知識を用いて論理的に説明できている。	リサーチから明らかになったことについて記述し、専門基礎知識をある程度用いて説明できている。	リサーチから明らかになったことについて記述し、専門基礎知識を用いて説明しようとしている。	リサーチから得られた情報についての記述はできているが、専門基礎知識を用いての説明はできていない。	リサーチから得られた情報の記述もできておらず、専門基礎知識も用いられない。

- コモンループリック(リサーチ)の全体を示したものです。これをもとに下位学年用と上位学年用を作成しています。

目標型コモンループリック全体版(チームワーク) 2013***

定義

メンバー個人の行動(チームの課題における努力、他のメンバーとの交流におけるマナー、チームの話し合いに対する貢献)

	4	3	2	1
チームでの話し合いへの参加	チームでの話し合いにおいて、話し合いを進めさせるような建設的発言を積極的にしている	チームでの話し合いにおいて発言を行い、話し合いをリードしている	チームでの話し合いにおいて関連する発言を行っている	チームでの話し合いの場に参加している
チームメンバーの話し合いへの参加の促進	メンバーの発言に対して、他のメンバーがそれに関連づけて発言できるように話し合いの流れを作り出すことで、メンバーの積極的参加を促している	メンバーの発言を整理し、関連づけた上で発言するなどして、メンバーの積極的参加を促している	メンバーの発言に対して、あいづちをうつ、うなずくなどして理解を態度に示すことで、メンバーの話し合いへの参加を促している	メンバーの話を遮ることなく聞くようにしている
グループワークへの個人の貢献	グループワークに積極的に参加して、高い完成度での課題の達成に多大な貢献ができている	グループワークに参加し、課題の達成に貢献できている	グループワークに参加して、作業の遂行に協力している	グループワークに参加して、要望を受けて作業を手伝っている
チームの雰囲気作り	チームの状況の変化に応じて、率先してチームの雰囲気をより良くする、あるいは雰囲気が悪くなった時にはそれを解消するような発言や行動をしている	チームの雰囲気を良くするために、自ら率先して発言や行動をしたり、メンバーのサポートをしたりしている	チームの雰囲気が良くなるようにメンバーに合わせた発言や行動をしている	チームの雰囲気を悪くするような発言や行動をしたり、態度を表したりすることなく、チームに参加している

- 科目の必要に応じて、このループリックの評価の観点の一部と、他のループリックの評価の観点を組み合わせて活用することができます。

コモンルーブリック:多様性理解

KUIS 学修ベンチマークの「心豊かな世界市民」とは、多様な世界の人々や自分たちの社会について理解を深め、他者に対する共感的な感覚や態度を身につけ、世界市民として行動できる心豊かな人材になることである。とりわけ、多様性理解では、自分や、自分と同じ社会的・文化的背景を持つ人たち、異なる社会的・文化的背景を持つ人たちがいることを理解し、多様な世界や社会を大切に考え、柔軟に行動できるような能力の獲得を目標としている。

	4	3	2	1
文化に対する自己理解	異なる文化に直面しても、その違いを尊重することができる。文化について自分がどのような偏見を持っているかを理解し、異なる文化に冷静に対処することができる。	異なる文化に直面して、その違いを尊重することができる。文化について自分がどのような偏見を持っているかに気がついている。	異なる文化に直面して、自分たちの文化との間に違いがあることに気がついている。	異なる文化と自分たちの文化の違いを理解できず同じようにとらえている。
文化の枠組みに関する知識	異なる文化に属する人々の、社会、経済、歴史のそれぞれが、相互に関連する重要な要素であることを理解し、複数の文化に関する知識を深めている。	異なる文化に属する人々の、社会、経済、歴史のそれぞれが、相互に関連する重要な要素であることを理解している。	異なる文化に属する人々の、社会、経済、歴史について基本的な理解をしている。	異なる文化に属する人々の、社会、経済、歴史をばくぜんと知っている。
他の文化に対する知的好奇心	他の文化について、これまでの学習に基づいた詳細で具体的な疑問や幅広い関心を持っている。得られた応答をもとに、さらにものの見方を発展させたり調べたりするなどして、自らの疑問や関心について掘り下げている。	他の文化について、これまでの学習に基づいた詳細で具体的な疑問や関心を持っている。得られた応答から、新たな疑問や関心を発展させている。	他の文化について、これまでの学習に基づいた疑問や関心を持っている。	他の文化について、単純な疑問や関心を持っている。
自分とは異なる文化に属する人々との交流	自分たちとは異なる文化に属する人々との交流の場面では、自分から能動的・主体的に話題提供を行ない、交流を活発にしている。	自分たちとは異なる文化に属する人々との交流の場面では、自分から能動的に交流の輪に加わって話題提供を行なっている。	自分たちとは異なる文化に属する人々との交流の場面では、自分から自己紹介や挨拶を交わし、交流の輪に加わっている。	自分たちとは異なる文化に属する人々との交流の場面では、周囲から促されれば、自己紹介や挨拶程度の会話ができる。

資料2 教室外プログラム及びアクティブラーニング型授業の要件

2014年1月9日現在

学生の主体的な活動と学修成果の獲得を意図した教室外プログラムの要件

本事業では、学生の主体的な活動と大学等の教育目標の達成に向けた教室外プログラムの要件を示す。

学習目標と目標達成に向けた学習活動、それら取り組みの成果を測定する評価方法が、三位一体となつて明確に設定されている必要がある。プログラムには、教員が関与する多様な経験や体験を通じた学術的な学びと現実世界を往還させる仕組みがあり、ルーブリック等の客観的な評価規準を活用し、教員と学生との質の高いインタラクションによって展開されるものである。

学生の主体的な学びを引き出すには次の要件が必要である。

《学習目標》

1. 学習目標として、大学や学部学科の教育目標に合致した、汎用的あるいは専門的な知識及び技能等の修得を設定していること。

《学習活動》

2. 学習目標が達成できる活動であること。
3. 学生の意欲がかき立てられ、取り組みがよい活動であること。
4. 学生が自ら活動に参画できるよう設計されており、また、教員が関与して仕向けていること。
(学生任せになっていないこと)
5. 多様な経験や体験を通して学術的な学びと現実世界を往還させる仕組みがあること。
6. 学習目標の達成を認識するために、ふりかえりの機会が活動の途中および活動後に設定されていること。
(機会例：日々の活動記録や活動日誌といった個人の振り返りだけでなく、グループやクラスでの発表・意見交換による共有も含めることが望ましい)
7. 学生同士やステークホルダー（学外活動の受け入れ先である団体や組織の担当者や関係者等）とのコミュニケーションの機会が設定されていること。
(設定された学習目標によっては、学生同士やステークホルダーと議論する機会の設定が必要)

《評価活動》

8. ステークホルダーからの評価が組み込まれていること。
9. 形成的評価が取り入れられ、教員による迅速で効果的なフィードバックがあること。
(フィードバック例：全体への説明、グループへの説明、個々の学生への説明)
10. 総括的評価に用いる成果物には、多様な表現方法が取り入れられていること。
(成果物の例：ビデオ、プレゼンテーション、ニュースレター、レポート等)

以上

大学間連携共同教育推進事業『主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築』取組
関西国際大学・淑徳大学・北陸学院大学・くらしき作陽大学

学生の主体的な活動と学修成果の獲得を意識したアクティブラーニング型授業の要件

大学間連携共同教育推進事業では、学生の主体的な学びのために、ハイ・インパクト・プラクティスを充実させていくことが 1 つの柱となっている。そこで、教室で行われる授業を想定し、学生の主体的な活動を促進し、学修成果を得るためのアクティブラーニング型授業の要件を以下に通り整理する。これらの要件を満たす授業を各連携校において充実していく。

．．．．

授業科目の「学習目標」、その達成に向けた「学習活動」、達成度を測定する「評価方法」を三位一体として明確に設定することが必要である。その上で、次の要素を満たすことが重要である。

《学習目標》

11. 各授業科目の学習目標として、学修成果を設定していること。ここでの学修成果は、授業を通して修得できる汎用的な能力、専門的な知識及び技能等のうち、大学及び学部学科の教育目標に合致しているものを指す。

《学習活動》

12. 学習目標が達成できる活動であること。
13. 学生が自ら活動に参画できるよう設計されており、また、教員が関与して仕向けていること。
(学生任せになっていないこと)
14. 学習目標の達成を認識するために、ふりかえりの機会が活動の途中および活動後に設定されていること。
(機会例：個人のふりかえりだけでなく、グループやクラスでの発表・意見交換による共有も含めることが望ましい)
15. 学生同士のコミュニケーションの機会が設定されていること。
(設定された学習目標によっては、学生同士が議論する機会の設定が必要)
16. 学修成果のエビデンスとなる成果物の作成が課されていること。
(成果物例：レポート、プレゼンテーション、ビデオ、ニュースレター等)

《評価活動》

17. 形成的評価が取り入れられ、教員からできるだけ早く、口頭や記述によるフィードバックがあること。
(フィードバック例：全体への説明、グループへの説明、個々の学生への説明)
18. 評価には、多様な評価方法が取り入れられていること。
(評価方法の例：テスト、ルーブリック等)

以 上

資料 3 連携機関による評価

『大学間連携共同教育推進事業』

― 主体的な学生のための教学マネジメントシステムの構築 ―

第2回 外部評価委員会 評価シート（5段階評価）

評価者名（ 小笠原 正明 ）

< 評価項目 >

1. ハイ・インパクト・プラクティスの充実

学生が主体的に考え、活動のできる HIP が充実しているか。

評価項目	5段階評価	コメント
1	※該当する数字に○をつけてください。 ⑤ : うまくいっている 4 : どちらかといえばうまくいっている 3 : どちらともいえない 2 : どちらかといえばうまくいっていない 1 : うまくいっていない	関西国際大学と淑徳大学を中心に、多様で、グローバルな展開をも視野に入れた、多くのHIP教育外プログラムが実施されている。サービスラーニング、インターンシップ、キャプストーンなど性格が異なる取組みが混在しているようにも見えるので、概念の整理を行い、学部・学科の正規のカリキュラム（あるいは正規外カリキュラム）として構造化をはかる必要がある。新しい取組みの中には、未成熟なものも見られるので、連携してレベルの向上を目指していただきたい。

2. 学修成果の評価方法の開発

評価項目	5段階評価	コメント
2	※該当する数字に○をつけてください。 ⑤ : うまくいっている 4 : どちらかといえばうまくいっている 3 : どちらともいえない 2 : どちらかといえばうまくいっていない 1 : うまくいっていない	パリユールーブリック等を導入してから日が浅いせいもあるが、未だ日本の大学の現実に即した評価スキームとして定着しているとは言いがたいところがある。他のデータと合わせて評価するという方向は正しいが、その場合でも、教育現場との対話にもとづいた、ルーブリック自体のブラッシュアップが必要。また、4大学の密接な連携による日本版ルーブリックの構築が目指されていない点にも不満がある。評価は3と4の中間で、やや4に近いという程度。

3. 学生支援型 IR の構築

学生支援型 IR が構築できているか。

3	※該当する数字に○をつけてください。 ⑤ : うまくいっている 4 : どちらかといえばうまくいっている 3 : どちらともいえない 2 : どちらかといえばうまくいっていない 1 : うまくいっていない	広範囲に時系列に沿ったデータの集積が行われている。この種の「ビッグデータ」は高等教育においてますます重要になりつつある。記名式を基本としているので、データ管理には十分な注意を払う必要があるが、その点も含めて、学生支援型IRのモデルとなることが期待される。
---	---	---

< 総合評価 >

5段階評価	コメント
※該当する数字に○をつけてください。 ⑤ : うまくいっている 4 : どちらかといえばうまくいっている 3 : どちらともいえない 2 : どちらかといえばうまくいっていない 1 : うまくいっていない	関西国際大学と淑徳大学を中心に、エネルギーに教育改革に取り組んでいる。特に、フィールドを活用した教室外プログラムの展開には見るべきものがある。その影響は4大学に波及し、さらに広がりを見せている。これらの取組みは、いずれも教職員に多大な負担を強いるものなので、今後、持続可能な教育活動とするための工夫が必要になるだろう。概念の整理を行い、枝葉を除いて、幹となるものをはっきりとさせていただきたい。最後の事業年度に期待する。

『大学間連携共同教育推進事業』

— 主体的な学生のための教学マネジメントシステムの構築 —

第2回 外部評価委員会 評価シート（5段階評価）

評価者名（ 大塚 雄作 ）

<評価項目>

1.ハイ・インパクト・プラクティスの充実

学生が主体的に考え、活動のできるHIPが充実しているか。

評価項目	5段階評価	コメント
1	※該当する数字に○をつけてください。 5 : うまくいっている ○ 4 : どちらかといえばうまくいっている 3 : どちらともいえない 2 : どちらかといえばうまくいっていない 1 : うまくいっていない	各連携大学において、それぞれの大学・学部等の特色を活かしたHIPが工夫され実行されている。この種の試みは、教職員にかかる負担も小さくなく、それを継続的に実施してきていることに敬意を表すると共に、アンケートなどによって、参加学生や地域などのステークホルダーの満足度も全体的に高く、意義の高い取り組みとなっている。今後の展開として、サービスマーケティングやインターンシップ等、海外から取り入れた実践の枠組みにとらわれることなく、何か独自の試みが産み出されていけるとよい。それは、全く新しい取組である必要はなく、現在行っているものを、自らの風土に合った形でブラッシュアップしていくところから生まれてくるということもあるだろう。また、High Impactということはどういうことなのか、また、そのことが実際に実践の中でどのように起こっているのか、そして、それが日常的な学びとどうブリッジングされていくのか、そんな点に注目して、実践の動向を把握し共有していくことにも専心されれば、さらなる発展が期待できる。

2.学修成果の評価方法の開発

評価項目	5段階評価	コメント
2	※該当する数字に○をつけてください。 5 : うまくいっている ○ 4 : どちらかといえばうまくいっている 3 : どちらともいえない 2 : どちらかといえばうまくいっていない 1 : うまくいっていない	ルーブリックを活用した評価は、そのルーブリックを、関係者によって構成するプロセスに大きな意義を見出すことができる。さらに、それを実際に活用する中で、議論を深めつつ改訂して安定したものとしていくことが、その実践共同体を形成していくための一つのツールとして重要な役割を果たすものと位置づけられる。その意味で、各大学において、それぞれルーブリックが構成され、そのルーブリックを共通の評定ツールとして、日頃の教育やHIPについて、学内のかなり広範に活用されてきていることはなかなかできることではない。本プロジェクトがその推進役として機能してきているものと思われる。ルーブリックの表現など、細かい点ではまだ十分ではないと思われる部分もあり、利用目的や状況にも留意しつつ、信頼性や妥当性といった評価ツールとしての質に関わる基礎的な分析もなされていくことが望まれよう。また、学生の自己評定などは、場合によっては、ルーブリックの形態をとることよりも、授業アンケートなどの評定形式の方が項目数も増やすことができるし、その合成得点などを利用すれば、より安定した指標が得られる可能性も大きく、評価者や評価の目的に即して適切な評価ツールを模索していくことにもチャレンジしていくとよい。いずれにしても、本プロジェクトのコミュニティ内の一つのコミュニケーションツールとして有効な素材でもあり、ルーブリックのあり方について議論をさらに深めていくことが望まれる。なお、その際、基本となるルーブリックは共有しつつ、それぞれの大学、それぞれの学部で、より適合性のある独自のルーブリックの活用へと発展していくという姿も視野に入れておくともよいであろう。

『大学間連携共同教育推進事業』

— 主体的な学生のための教学マネジメントシステムの構築 —

第2回 外部評価委員会 評価シート（5段階評価）

評価者名（ 大塚 雄作 ）

<評価項目>

3.学生支援型 IR の構築

学生支援型 IR が構築できているか。

3	※該当する数字に○をつけてください。 5 :うまいっている ○ 4 :どちらかといえばうまいっている 3 :どちらともいえない 2 :どちらかといえばうまいっていない 1 :うまいっていない	HIPの取組は、それだけで完結するものではなく、日常的な大学での学びにつながっていくべきものであり、その意味でも、その効果を大学として、学部等の単位として、どのような効果があるのかを多角的、多面的に把握しておくことが求められる。その点で、学生調査なども含めた「間接評価」に関わる学生のデータに加えて、GPAなどの「直接評価」に関わるデータもマージできる形で収集しており、さらに、その分析に基づいて、いくつかのグループを定義するなどして、学生の多様性に応じた指導のあり方を模索している点は、IR的な取組が教育実践に結びつけられる可能性を窺わせるものである。なお、教育実践に関しては、PDCAだけでは捉えられない側面が多々含まれるため、いわゆる「羅生門アプローチ」という観点から、多面的、多角的な視点から、取組や実施体制などに関わる資料収集に努めることが望まれる。例えば、教育を提供する側の目的と、教育を受ける側の目的とは、必ずしも一致するわけではないし、また、取組が一時的にうまくいったとしても、それに関わる人的労力や予算的コストなどの点で、持続可能性という点で問題が内包されている場合もある。教育的な実践は、ある種の学びのコミュニティを形成していくことが肝要であり、学生が身に付けた成果を問題にするとときに、一人が得た知識とか技能ということのみならず、学生同士、あるいは、教員とのつながりなどを捉えてみるのも一法であろう。なお、IRは、組織的な取組や体制に関わる評価への活用が目的とされるものであるが、学生等の個人についての形成的評価に利用するためのアセスメントとは、少なくともそれぞれに適切な手法が異なるということも共有しておくといえよう。
---	---	--

<総合評価>

5段階評価	コメント
※該当する数字に○をつけてください。 5 :うまいっている ○ 4 :どちらかといえばうまいっている 3 :どちらともいえない 2 :どちらかといえばうまいっていない 1 :うまいっていない	各大学で、真摯にHIPの推進、および、ルーブリック、IR等の実行を進めており、充実したプロジェクトの推進が見られる。大学連携という難しさのあるなかで、それぞれの大学から教員が内地留学的に出向するなどして、一段深い連携をとる努力をしていることが窺える。それぞれまだ課題は残されていたり、また、大学による温度差も当然生じているようでもあるが、このつながりを今後さらに充実させていくことを通して、それぞれの大学の教育の活性化を核に、我が国の高等教育の質的な向上に向けて大きな示唆を与えてくれるプロジェクトに成長する可能性が感じられる。通常、この種のプロジェクトは、計画年度が終了して、予算補助も打ち切られるところで雲散霧消してしまう場合がほとんどであるが、1年を残して、一般社団法人化することの検討も始められており、全体会にオブザーバーとして参加していた新たな大学も数大学あって、今後、参加大学数も増大することも見込まれる。その発展性がどのレベルで実現するか、今後の大学連携の再組織化の動向も大いに注目されるところである。

資料 4 全体会

第 1 回 大学間連携共同教育推進事業 全体会

日 時：2012 年 10 月 12 日（金） 13：00～

場 所：関西国際大学 尼崎キャンパス 10 階大会議室

出席校：淑徳大学、北陸学院大学、くらしき作陽大学、関西国際大

会次第

1. 開会

2. 各大学学長挨拶

3. 出席者の紹介（各大学より）

【資料 1】

4. 事業の全体像の説明

【資料 2－1、2－2】

5. 本年度の取組

（1）米国先進事例調査

【資料 3】

（2）大学入試センターからの依頼

【資料 4】

（3）ディプロマポリシー（DP）、カリキュラムポリシー（CP）、
カリキュラムの見直しに向けた現状把握

【資料 5】

（4）ハイインパクトな教育方法の充実および
ルーブリックの開発について

【資料 6－1、6－2】

（5）連携校からの確認事項

【資料 7】

（6）2013 年度末までの実施計画について（依頼）

【資料 8】

（7）交付申請書の確認

（8）会議日程について（推進会議全体会、推進会議、各部会）

6. 閉会

以 上

第2回 大学間連携共同教育推進事業 全体会

日 時：2013 年 10 月 12 日（土）14:15～17:15

場 所：関西国際大学 尼崎キャンパス 10F 大会議室

出席校：淑徳大学、北陸学院大学、くらしき作陽大学、関西国際大学

次 第

1.開会の挨拶

関西国際大学 学長 濱名 篤

2.出席者のご紹介（各大学より）

3.経過報告（全体）【資料 1】

関西国際大学 学長補佐 藤木 清

4.各校の教育目標等の状況について【資料 2】

淑徳大学 学長特別補佐・コミュニティ政策学部長 磯岡 哲也

北陸学院大学 副学長 朝倉 秀之

くらしき作陽大学 学長顧問 高等教育研究センター所長 有本 章

5.アセスメントプランの構築に関する提案について【資料 3】

関西国際大学 学長 濱名 篤

関西国際大学 学長補佐 藤木 清

<休 憩>

6.共通学生調査の提案について（大学 IR コンソーシアムと独自調査）【資料 4】

関西国際大学 学長補佐 藤木 清

7.関西国際大学のグローバルスタディについて【資料 5】

関西国際大学 高等教育研究開発センター次長 山本 秀樹

8.閉会の挨拶

淑徳大学 学長 足立 勲

※本配布の資料につきましては、連携校内限においてのお取扱いをお願い申し上げます。

（敬 称 略）

以 上

第3回 大学間連携共同教育推進事業 全体会

日 時：2015年2月14日（土）13:30～17:00

場 所：関西国際大学 尼崎キャンパス 10F 大会議室

出席校：淑徳大学、北陸学院大学、くらしき作陽大学、関西国際大学

次 第

1.開会の挨拶 13:30～13:35（5分）

関西国際大学 学長 濱名篤

2.出席者紹介（各大学より） 13:35～13:45（10分）

淑徳大学・北陸学院大学・くらしき作陽大学・関西国際大学

3.取組の現状について 13:45～14:05（20分） 【資料1】

関西国際大学 学長補佐 藤木清

4.HIP およびルーブリックに関する振り返りについて 14:05～15:10 【資料2】

（65分：発表各大学よりそれぞれ15分、議論20分）

淑徳大学 コミュニティ政策学部 准教授 矢尾板俊平

北陸学院大学 短期大学部 教授 富岡和久

人間総合学部 准教授 辻直人

くらしき作陽大学 高等教育研究センター 田崎慎治

<休 憩 20分> 15:10～15:30

5. 取組の展開について 15:30～17:00（90分：説明60分、議論30分） 【資料3】

関西国際大学 学長 濱名篤

関西国際大学 学長補佐 藤木清

6.閉会の挨拶 17:00～

淑徳大学 学長 足立 勲

（敬 称 略）

以 上

第4回 大学間連携共同教育推進事業 全体会

日 時：2016年2月13日（土）9:30～17:00

場 所：関西国際大学 尼崎キャンパス 10F 大会議室

出席校：淑徳大学、北陸学院大学、くらしき作陽大学、関西国際大学
鹿児島国際大学、富山短期大学、梅光学院大学、比治山大学

次 第

1.開会の挨拶 9:30～9:35（5分）

関西国際大学 学長 濱名篤

2.出席者紹介（得永部長より） 9:35～9:40（5分）

淑徳大学・北陸学院大学・くらしき作陽大学・関西国際大学
鹿児島国際大学、富山短期大学、梅光学院大学、比治山大学

3. 全体的な概要説明 9:40～10:00（20分）

関西国際大学 学長補佐 藤木 清

4. 各校における事業進捗状況について 10:00～12:00（120分）

淑徳大学：コミュニティ政策学部 准教授 矢尾板俊平（30分）

北陸学院大学：短期大学部コミュニティ文化学科 教授 富岡和久（30分）

くらしき作陽大学：高等教育研究センター

子ども教育学部子ども教育学科 助教 田崎慎治（30分）

関西国際大学：学長補佐 藤木清（30分）

<休 憩 60分> 12:00～13:00

5. 各分科会の取り組みについて 13:00～14:00（60分）

AL研究会：大学改革室 室員 荒木俊博（15分）

学生交流会：北陸学院大学社会学科 准教授 若山将実（15分）

論理的思考力テスト：学長補佐 教授 上村和美（15分）

IR研究会：学長補佐 教授 藤木清、教務部長 得永義則（15分）

6. 評価委員からの質疑・応答 14:00～14:30（30分）

<休 憩 20分> 14:30～14:50

7. 評価・助言 14:50～15:20（30分）

<休 憩 10分> 15:20～15:30

8. 連携事業の今後の活動と発展について 15:30～17:00（90分）

（敬称略）

以 上

資料 5 シンポジウム

ポスター (表)

平成 24 年度文部科学省大学間連携共同教育推進事業採択

「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」シンポジウム

質保証を実現するための アセスメント

**参加費
無 料**

定員 200 名
(申込順)

2016
日時 **11/10** 木
10:30 - 16:40 [10:00 受付開始]

会場 **ラッセホール
2階ローズホール**
(神戸市中央区中山手通 4-10-8)

◇ 第 1 部 ◇ (10:30 ~ 12:00)
連携事業の成果報告

◇ 第 2 部 ◇ (13:00 ~ 16:40)

基調講演

Dr. Susan Albertaine

(Senior Scholar, Office of Integrative Liberal Learning and the Global Commons, AAC&U)

「すべての学びのために：
米国におけるアセスメントデザインの変革」

パネルディスカッション

Dr. Susan Albertaine

小笠原 正明 「デジタル時代のコンピテンシーと学習成果アセスメント」

大塚 雄作 「日本の大学教育に求められるコンピテンシーとその評価」

演 名 篤 「3つのポリシーと質保証」



- ・新幹線「新神戸駅」から神戸市営地下鉄「元町駅」所至約4分
- ・神戸市営地下鉄「元町駅」下車 徒歩5分
- ・京・阪神「元町駅」下車 徒歩8分
- ・京・阪急・阪神・神戸市営地下鉄「三宮駅」下車 徒歩15分

主 催：関西国際大学、淑徳大学、北陸学院大学、くらしき作陽大学
後 援：一般社団法人大学教育学会、初年次教育学会

共 催：一般社団法人学修評価・教育開発協議会

● 趣旨

予測不能な社会で活躍できる人材の育成をするには、質を伴った学士課程教育への質的転換を図る必要があることが、平成24年の中教審質的転換答申で指摘されました。この改革の方向性に賛同した大学が連携し、能動的学修や教室外プログラム等を構造化し、学生に強いインパクトを与えるように工夫した教育プログラムである「HIP（High-Impact Practices）」による教育方法の充実、学修成果の可視化、教員の教育力の向上を図ることを通じて、組織的教育を可能にする教学マネジメントの確立に取り組んできました。

ここに、5年間の取組の概要と成果を報告し、学修成果の質保証を実現するためのアセスメントについて考えるシンポジウムを企画しました。日本の大学に求められるコンピテンシーはどのようなものか、どのように伸ばすのか、また、どのように評価するのか、米国におけるアセスメントデザインの最新動向をヒントにみなさんと議論したいと思います。

● 登壇者紹介

Dr. Susan Albertaine

全米大学・カレッジ協会（AAC&U）のIntegrative Liberal Learning and the Global Commons局の上級研究員。2008年からLEAP States Initiativeを監督。カレッジ・オブ・ニュージャージー名誉教授（英語学）。

小笠原 正明

一般社団法人大学教育学会会長、北海道大学名誉教授。専門は放射線化学、考古物理学、科学技術教育。主著として、『大学改革を成功に導くキーワード30 —「大学冬の時代」を生き抜くために』（学事出版2013年共編著）、『北大教養教育のすべて』（東信堂2016年共編著）など。

大塚 雄作

独立行政法人大学入試センター教授、副所長、試験・研究統括官、入学者選抜研究に関する調査室室長。日本テスト学会理事、一般社団法人日本教育心理学会社員、一般社団法人大学教育学会理事など。教育心理学、教育評価を専門分野とし、大学評価、FD、大学入試等をフィールドとする。

濱名 篤

学校法人演名学院理事長、関西国際大学学長。一般社団法人大学教育学会常務理事、日本高等教育学会理事、初年次教育学会常任理事。主な兼職として、文部科学省中央教育審議会臨時委員、独立行政法人大学入試センター運営審議会委員副議長、国立教育政策研究所評議員など。専門は高等教育論、教育社会学。

● 申し込み方法

参加をご希望の方は、**10月27日（木）までに**件名を「シンポジウム申し込み」とし、本文に①名前、②所属、③役職等、④連絡先（電話&メールアドレス）をご記入の上、Eメールにて下記までお申し込みください。

お申し込み
お問い合わせ先

大学間連携共同教育推進事業室 HP ▶ <http://renkei.kuins.ac.jp/>
〒673-0521 兵庫県三木市志染町青山1丁目18番 関西国際大学内
電話：0794-84-3607 E-mail：kaikaku-renkei@kuins.ac.jp

プログラム

第1部	
10:30～10:40	【総合司会】 関西国際大学 教務部長 得永 義則 開会の挨拶（シンポジウムの趣旨説明含む） 関西国際大学 学長 濱名 篤
10:40～12:00	本取組の成果報告 ○関西国際大学 学長補佐／評価センター長 グローバル教育推進機構 教授 藤木 清 淑徳大学 看護栄養学部 准教授 小川 純子 関西国際大学 高等教育研究開発センター長／人間科学部 教授 安部 幸志
12:00～13:00	ポスターセッション
第2部	
13:00～13:10	講演者紹介 関西国際大学 学長 濱名 篤
13:10～14:40	基調講演 「すべての学びのために：米国におけるアセスメントデザインの変革」 ○講師：Dr. Susan Albertine(Senior Scholar, Office of Integrative Liberal Learning and the Global Commons, AAC&U) ○通訳：森 利枝（独立行政法人大学改革支援・学位授与機構 研究開発部 教授）
14:40～14:50	休憩
14:50～15:50	話題提供 ○小笠原 正明（一般社団法人大学教育学会会長／北海道大学 名誉教授） 「デジタル時代のコンピテンシーと学修成果のアセスメント ーSTEM分野を中心にー」 ○大塚 雄作（独立行政法人大学入試センター 試験・研究統括官（副所長）） 「日本の大学教育に求められるコンピテンシーとその評価」 ○濱名 篤（関西国際大学 学長） 「3つのポリシーと質保証」
15:50～16:30	パネルディスカッション 【パネリスト】 ○Dr. Susan Albertine ○小笠原 正明 ○大塚 雄作 ○濱名 篤 【司会】 ○富岡 和久（北陸学院大学 図書館長／教授）
16:30～16:40	閉会の挨拶 北陸学院大学 学長 町田 健一